

思ひ出しつゝ物語して、あはれ都の春をも諸共に、いつしか宇治
小野のわたりのあはれをも、音にのみ聞く物かはなど戯れごちて、
やう／＼日もかたぶきがたに成行けば、河水のひかりもいと夕
日かげにてりあひたり。霞の絶間にふじのねの高やかにうかび出
でたるも、めなれぬこゝちともに興ありて、いとゞあかす。

ふじのねの霞の衣ひきかへてすみだ川原に見るも珍し

河風に流す霞はふじのねの煙をそひ〔ひは〕てたつかとぞみる

はや暮れぬべし、かへりなんとまめやかに打驚かすにぞわりなく
て立ちぬ かの三圍の岸に舟待する程なれば、かしこまでとて且
見かへりがちなるも、道すがらあかすのみ思ひつけられるれば、
春をすぐさで又もとはましとひそかに契る。

此比の花にそめてし心をも野への縁にいとゞ色そふ

などひとりごちて、暮れぬべきけしきなれば、三圍の御社にも詣
です、又こそと堤よりぬかづきて斷り申す。罪うべきわざなり。
ふなをさもいたう待ちわびてや、うちふしぬるを驚かして、漕出る
ほどくれはてたり。やよひ二十日あまりなれば、くらきよのさま
に霞さへ立渡りて、人々もやう／＼ゑひもてゆくに、いとゞ物を
見えわかず、たゞひねもすのおかしさのみ盡させぬことに思へり。
かくあくがれなば、おのがとり／＼、山蔭のやどり物うくや成
果てんなど、戯れて打笑ひぬ。

それから安藤朴翁が、元祿十年常陸に下つた紀行の常陸帯に、隅田
川での詠がある。又北村季文（季吟の裔）の隅田川遊覽記は天保十四

安藤朴翁の
紀行
北村季文の
記

年九月二日、傳奏の兩卿德大寺實堅、日野資愛に相伴して、墨田川に川逍遙した記である。共に今は略して置く。

江戸の歌人

翻つて江戸の歌人の吟哦を一誦しよう。戸田茂睡撰の鳥之迹に、

眞土山

梨本茂睡

戸田茂睡

たのめつゝまつちの山に人はこず我が庵崎に又ひとりねん

清水濱臣編の近葉菅根集に、賀茂眞淵の縣居アガタキの高殿で納涼した折の

賀茂眞淵の納涼會

眞淵をはじめとして門弟たちの長歌を多く出してゐる。隅田河畔の清風に夏を忘れた雅會が想ひやられるのである。左に二篇を載せよう。

信

益

石イシの上カミ、古き時より、限なき、例にいへる、武藏野の、野べもせし

とや、しなが鳥、安房に向へる、浦波に、かけてつくれる、鳥が

なく、あづまの都、かく見れば、不二の高根の、白雪の、いつともわかず、とに見れば、筑波の山の、いやしげき、御代のみかげを、八百萬、あふぎてつどふ、民草の、おのがじしさへ、葛飾の、昔のまゝの、繼橋の、つぎて久しく、變らじな、かゝる時にし、角田川、かはべによする、漣の、音もさやけく、ふく風の、涼しきゆふべ、天雲の、高き臺に、思ふどち、携さひのぼり、おもはしき、方も見はらし、くるほしき、ことをも更に、忘れつゝ、樂しき時に、逢ひにけるかも。

風わたる松よりをちの浦波も此のおぼしまによるとこそ見れ

源 秀 信

久方の、日かげかしこき、六月ミナツキの、たへぬ暑さに、大方の、人の

やどりは、かはほりの、扇の外、風もなし、しかはあれども、
高き屋に、上りて見れば、角田川、大河のべも、せきまでに、ゆ
きかふ千々の、大船の、ゆたけき御代に、すむ民の、おのがさま
く、涼みとり、心をやると、みやびたる、物の音まじり、わざ
をぎの、ゑらぎもしどに、賤しきも、よきもいとはず、うちはへ
て、遊ぶも見つゝ、夏の日の、光忘れて、浮雲の、くるゝもしら
ぬ、今日にやはあらぬ。

あはと見るあはの浦風遠けれど袂涼しく通ひ來にけり

加藤千蔭

加藤千蔭のうけらが花には、隅田川の歌が頗る多い。

霞中春雨

墨田川簑きてくだす筏師にかすむあしたの雨をこそしれ

此の一首は名吟として、最も人口に膾炙してゐる。

墨田河の花見にまかりけるに盛なりければ

春はたゞ都鳥にもみをかへて散るとも花のなみにかづかむ

こゝは荒川の下つ瀬なれば

吹く風の荒河の瀬に雪とちり波とよせくる山櫻かな

孝標の女のおすだ川といひけんも此川なり

東路のおすだ川べのさくら花あすさへ訪はん散りな亂れそ

郭公

すみだ河堤に立ちて舟までばみなかみ遠くなくほとゝぎす

是も亦景情雙絶と稱へてよい歌である。

夏の夕角田河へ舟をうかべて

第二篇 隅田川

わたつみの沖より通ふ夕風に墨田河原の眞菰なみよる

冬眺望

角田河きしのむらあし枯れふして甲斐が嶺遠き雪をみるかな

近葉菅根集に載せてある同じ人の左の長歌も、朗々誦すべきものである。

む月五日の夜雪ふりけるがつとめては渡りければ春海、雄風な
どいざなひて舟にて石濱の庵へゆきてよめる

東雲の、あけゆくあした、我宿の、垣ほの小笹、白雪の、つもるが
上に、朝日かけ、にはへる見れば、角田川、きしのみ雪や、いか
ならむと、思ふ心に、さそはれて、小舟を浮べ、葛飾と、豊島の
かたを、はるくと、ひだりみぎりに、見さけつゝ、みをさかの

ぼり、みなぎはの、いほりに近く、舟はてゝ、かへりみすれば、
遠近の、梢の雪は、泊瀬女ハツセメが、ゆふ花なして、うみをなす、長き
堤は、白妙の、麻手作を、千五百むら、さらせる如く、上つ瀬の、
綾瀬の水を、さし下す、筏の床に、むらくゝに、消残る雪は、散
る花の、面影見せつ、春深く、匂ふ櫻と、秋の夜の、さやけき月
の、さかりをも、唯一時に、つどへつゝ、見るこゝちする、今日
にやはあらぬ。

散る花か月の光か角田川きしのかれふにふれる白雪

小野古道家集に、

はじめの夏

大舟に小舟ひきそへ隅田川いで、遊ばむ夏は來にけり

第二篇 隅田川

村田春郷

村田春郷家集に、

月のあかゝりける夜角太河にて

諸人の船ぎほひするすみだ川月のいるまで遊びてゆかむ

村田春海

村田春海の琴後集に、

千蔭の石濱のやどりにて歌よみける時花錦を

角田川つゝみの花のから錦春はきてみぬ人やなからむ

又次のやうな長歌も詠んでゐる。

正月の六日ばかりよべの雪の名残見むとて角田川に舟を浮べて
みをのぼる、隅田河原の、川舟の、ゆく方遠き、上つ瀬の、堤を
見れば、白雪に、猶埋もれて、下草の、緑もわかず、立並ぶ、木
々の梢は、春の日を、早く待ちえて、うらくくと、けぶりそめた

り、下つ瀬を、かへり見すれば、氷ゐし、芦邊の洲島、波の上に、
友よびかはし、遠方や、霞のまより、夕虹の、たつかとばかり、
久方の、雲井に高く、かゝる長橋。

かへし歌

きえせずばあすもとひこむ角田川かは遠白くふれる沫雪

松平定信

松平定信の三草集に、

角田川の月を

言問はむ鳥のねぶりも静にて月にこたふる秋の川波

角田川の都鳥

角田川今はまことの都鳥昔のひなの事や問はまし

此の一首も言廻しに面白みがある。

横山由清

後の人のでは、横山由清の月舎集に、

名所霞

花をこそわけて來つるを角田川かへりみすれば霞なりけり

三條實美

三條實美の梨のかた枝にも、隅田川の詠が多い。其の内から數首を
抜くと。

花見に物しける折々よみし歌ども

月雪もたぐひなけれどすみだ川花ゆゑにこそ名は流れけれ

すみだ川月と花との盛にはゆきて遊ばぬ年なかりけり

對鷗莊にて

いそがしきつとめの隙をぬすみ來て橋場の里の月を見るかな

角田川の雪見にまかりて

黒川眞頼

角田川しづけき雪のけしきこそ花にまさりて見えわたりけれ
對鷗莊で忘中閑を得てくつろがれた故公の雅懷は、今にゆかしい。

黒川眞頼の墨水餘滴に、

河邊霞

角田川ひきしほはやき浪の上に流れてみゆるうす霞かな

船中夏月

水上にふね漕ぎゆけば墨田川いよく月はすゞしかりけり

千鳥

宵のまはきこえざりしを角田川夜のふけゆけば千鳥なくなり

狂歌

次に狂歌には左の如きものがある。後撰夷曲集に、

角田川にて

信 輔 公

きてみれば武藏國の江戸よりは北と東の角田川かな
徳和歌萬載集に、

隅田川

紀 定 麿

一ばいに硯の海をひき出してすりながしたる墨田川哉
石川雅望(宿屋飯盛)の六樹園家集に、

隅田川の花を

隅田川さけは武藏と下總の中にいと大きなるかはあり
朱樂菅江の朱樂館家集に、

隅田川

名に負はぬ東のはての都鳥白きは雪とすみだ川かな
狂歌江戸砂子集(千首樓堅丸の文化八年の序文がある。)に、隅田川、

墨田川いざこと問はん渡守業平橋はほど近きやと

松雨堂小夜風

ことわりや酒の名に呼ぶ隅田川鳥さへ嘴と足の赤きは

木立斧丸

此は雅言翌アスナラウ檜(越谷吾山撰)に、隅田川酒江戸羽衣酒とあるのを思ひ合せる
ものである。狂歌江戸砂子集續編に、同題、

都鳥みかはず隅田の渡守手足も赤くみゆる雪の日

濱 人

しら魚の簞はきえて角田川夜明にしるき花の横雲

折 安

以上の狂歌は、伊勢物語の故事などに基づいて詠んだもので、又掛詞

を使用したにしても品が悪くない。

俳諧

更に俳諧の方面では、蓼太全集(俳諧文庫の内)收むる所の墨水兩岸行を以て、最も興味のあるものとしなければならぬ。其の序文は月巢の手に成つて、情趣の掬すべきものがある。

墨水兩岸行

兩岸行

滋雨亭月巢記

天明かなるはじめの年、はじめの秋七日といふに、大川の邊に逍遙す。そのさま苦屋形二艘をうかべて兩岸にわかつ。東には雪中居士文母をはじめとし、西には嵐亭宜麥を先として、勝友旁臻る。おの／＼その佳景を探りて、行く水の深き淺き心の趣を水蒸に染めむとならし。さて秋七種のいろ／＼を竿頭に飾りてふたつの船のしるしとす。そも何の料ぞや。こゝは千舟百舟の行きかふ中

なれば、後れて來らむ人のたよりにぞ敬信〔敬は經歟〕のあその昔も思ひ出でん心にくし。そよや川風に薰り合うて、まねけるあり、くねるあり、七夕つめもうしろねたくやはあらぬ。又はにしに筆策、ひがしに笙を吹きすさみて、互の舟の遅速をおとづる。其聲亮々として鳳鳴鸞嘯唐めいたるよそひともいへばさらなりや。まづ佃島なる住よしの御神にぬかづき、川づらにそうて漕出でたり。このわたりは常にめなれし所なれど、秋のはつ空袂すしう、浪のみどりももてはやされて、富嶽千秋の雪に漱ぎ、筑峯萬丈の霞を汲む。雲霧のすがた時の間に消えてまたなびくなど、えもいはぬ氣色ぞかさゝぎのよりはの橋も作るべきなど見るうちに、はら／＼と音するにぞうたて興さめぬる心地ながら、洒淚〔編者云、蒲楚歳時記に〕

月六日雨曰「洗車雨」^一、とかいへるけふの名にしおへば、一しほ秋のあはれはそふめり。よしなくそこに漕寄せよと、あまのおし手もいとたゆく、吐江が別莊深潮樓にしばらく晴をまつ。とかくするうちに雨も名残なく、うき雲の行方もみどり立ちて、雨奇晴好すべてよろしと、各々うちさんじつ、もとの渚におり立ちて、かなたこなたに纜を解きぬ。四方の空ことにゆるやかにして、心を天地の外に遊ばしめ、筆を墨水の流に競ふ、藻志錯發し、體裁増奇なり。風調ことくく元祿の源に洄る。予がごときは才蚯蚓にひとしく、力蝨にはづかしめらるといへども、この時にあへるよろこばしき涙の露、せめては瑕なき玉の光をもあらそはまほし。在中將のいにしへ、貞室の昔もかゝる遊はありやなしやと、その都

鳥にとひてむかし。今朝よりもなほこの夕ばえのにはひくは、れるに、いとく倦ます行き行くに、ふとつき出でたる入相の鐘いとはしたなし。なほしも興盡きず、浪の綾瀬のあやまたず、木母寺のこなたにふたつの船を寄す。しらす夜とともに久かたの天の川原に棹さして、かの織女に宿からんとするにや。

墨水兩岸行

永代橋

秋ふるや住吉の岸の橋柱

蓼 太

東岸、芭蕉池

啼替て猶古池やきりくす

鳥 柱

西岸、三叉江

ながれ出る 缺盃や秋の水

停馬石

君が代や駒もといめず石の露

楊柳橋

塗下駄の少年行や橋の月

椎樹館

月見えてうれしの森の木間哉

首尾松

秋汐や葉裏をあらふいさり松

白馬津

秋の水馬の白泡ながれけり

嵐亭

逸賀

石意

古音

彭壽

龍舍

駒蹄口

駒形や絹一練の川の秋

三圍社

此宮居田面ながらの初穂哉

花容渡

乗合や提て千草の花筐

弘福寺

秋の蚊や鐵の牛もくらぶべし

淺草寺

もろ人の海潮音や秋の風

款冬瀨

夫水

宇平

宜麥

七樓

方壺

魚踊る葛西太郎や盆の月

金龍山

夕照や頬に月をまつち山

五百崎

賣居の誰庵崎ぞ秋の昏

黄茅原

取とめる戀とはなしに花野哉

秋葉山

稻妻や三尺房の納太刀

明鏡池

赤そふや磨れいづる秋の月

故流

梅素

蓼太

月巢

班象

一兆

望雪塚

澄よ月その世の雪をいざさらば

總泉寺 實盛古墓

鬢髭の墨田河原や水の月

白鬚宮

神まして波しら髭の秋すゞし

花川戸

秋ふるき奈良屋大和屋花川戸

梅兒塚

木母寺に客の借着や水の月

花鯨淵

沙羅

子興

文母

白羽

吐江

うつもるゝ鐘に聲あり秋の水

百 溪

關犀里

はつ雁や源氏の巻も此あたり

あや足

伊萬戸

望汐やこゝもくむかと瓦竈

三 駘

七星橋

七株の萩大名や橋の跡

月 守

神樹林

田樂の五十串飛や秋の風

完 來

誦し來ると、横巻を展觀するが如く、兩岸の名勝は彷彿として眼前に浮び出るのである。此う云ふ事は、當時市井の人が興味を感じた所の

俳文狂文

やうで、彼の鶴岡蘆水の筆で隅田川兩岸一覽の板行を見たのも、此の天明元年である由を、武江年表に出してゐる。

その他、横井也有的鶉衣には隅田川涼賦がある。又、太田南畝の「よものあか」(文化五年)には向島賦があるし、四方の留粕(文政二年)には角田川に三船を浮ぶる記がある。此等は俳文若しくは狂文で、其の輕妙な點は喜ぶべきものがあるけれども、言詞の猥雜なことを免れない所もある。それで今全文を載せることは略して置く。

俗曲小説

尙、俗曲及び小説等の方面を一瞥すると、古淨瑠璃に隅田川(山本土佐掾正本)があり、近松巢林子に雙生隅田川フタゴがある。謠曲に據つたのである。古今節唱歌の隅田川も亦梅若の事を謠つたのである。それから河東節の隅田川もやはり謠曲に基づいたものである。長唄にも隅

田川がある。(近世邦樂年表、寶曆六年三月の條に、兩洲隅田川名所盡と出てゐる。)其の賤機帶シツヘマオビも亦梅若の事を作つたもので、中に謠曲櫻川の趣致をも加味してゐる。其舞踊は、現今能く舞臺にも上る。近世邦樂年表を参照すると、文政二年六月の條に、八重霞賤機帶と題名を出して、作曲者には杵屋三郎助の名が見える。同書の編者は註して、山王の祭禮の出し物である由を言つてゐるが、それは本文の終の方の文句に合致するから、眞にさうと思はれる。楮演劇と云へば、劇方面の隅田川は、其の行はれた事はかなり古い。高野辰之、黒木勘藏兩氏の編纂に成る元祿歌舞伎傑作集には、出世隅田川、傾城隅田川、早送隅田川の三種が入れてあるのを見ても分る。同書編者の考説に、次のやうにある。

謠曲の隅田川や、お伽草子類の隅田河物語などの如く、梅若丸を題材とした歌舞伎劇は、江戸の劇場に於ては随分繰返されたもので、其の種類も恐らくは曾我狂言に次いで多いであらう。この傑作集に收めたのは其の三種だけであるが、これ以外に編者の見た繪入狂言本だけでも、紅梅隅田川、愛兄隅田川、藪入隅田川等がある。さうして年代記を閲すると、享保年間だけで、少くとも十種の隅田川物が興行されて居る。之によつても當代流行の一斑を知る事が出来るであらう。

又やはり長唄の吾妻八景(近世邦樂年表、文政十二年四月の條に出てゐる。)には隅田川の事を包含してゐる。それから端唄の「夕暮の」君は今」に至つては、頗る人口に膾炙してゐる所であるから、詞句を示

すまでもなからう。曲亭馬琴の小説隅田川梅柳新書は梅若傳説を以て脚色してゐる。かういふ類は尙尠くない。

賤機帯

名にし吾妻の角田川、その武藏野と下總の、ながめへだてぬ春の色、櫻にうかぶ、富士の雪、柳に沈む筑波山、紫匂ふ八重霞、錦をこゝに都鳥、古跡のわたりなるらん。春もくる空も霞の瀧の絲、亂れて名をや流すらん。笹の小笹の、風いとひ、花とめでたるうなる子が、ひとあきびとにさそはれて、行方いづくと白ゆふの、神に祈の、道たづね、浮きて漂ふ岸根の舟の、こがれくゝて、いざ言問はん。わが思ひ子の、ありやなしやと狂亂の、正體なきこそあやなけれ。船人は是を見るよりも、ヨイ慰と戯の、氣ちがひよく

と、手を打ち叩き、はやすにぞ、狂女は聞いて振返り、ア、氣遣とは、曲もなや、物に狂ふは我ばかりかは、鐘に櫻の物狂、嵐に波の物狂、菜種に蝶の、物狂、三つの模様をぬひにして、いとし我子に着せばやな子を、綾瀬川なにも似ず、心關屋の里ばなれ、縁の橋場の土手傳ひ、往きつ戻りつ爰彼處、尋ぬる我子はいづくぞや、教へてたべと夕汐に、船長猶も拍子にかゝり、それ其の持つたるすくひ網に、面白う花を漉スグひなば、戀ひしと思ふ其の人の、ありかを教へ參らせん。何面白う花を漉へとか、いでくゝ花を漉はん。あら心なの川風やな、人の思も白波に、散浮く花を漉ひ集めん、心してふけ、川風、沖の、鷗のちりやちりくゝむらくゝくゝはつと亂るゝ、黒髪も、とりあげて結ふ人もなし。船長今は氣の

毒さ、何がなしほにと立上り、そもさてもわごりよは、誰人の子なれば、何程の子なれば、尋ねさまよふ其の姿、みる目もうしといさむれば、音頭く〜と戯の、鼓の調引締めて、鞆鼓を打つて見せうよ。面白の春の氣色や、筆にもいかで盡さん、霞のまには樺櫻、雲と見えしは三吉野の、よし野の川の瀧つ瀬や、風に亂るゝ絲櫻、いとし可愛の兒櫻チヨ、したひ重ねし八重櫻、一重櫻の花の宴、いとしらし。千さとも薫る梅若や、惠を仰ぐ神風は、けふぞ日よしの祭御神樂ミカグラ、君が代を、久しかれとぞいはふ氏人。〔長唄大全に據る。〕

三餘言

萬里集九が東遊して太田道灌に會ふと、道灌は一日福〔即ち巨福山建長寺〕鹿〔即ち瑞鹿山圓覺寺〕兩山の禪侶を招き、畫舫數隻を墨水に泛べて、詩歌鼓吹、一時の壯觀を極めたと云ふ。其の事は梅花無盡藏の江上春望の詩にあつて、其の風流が今更のやうに想察せられる。戰塵の歛らなかつた日に於て尙さうであつた。偃武の後となつて、東都の人士が益々泰平に馴れるといふと、隅田河畔は花晨月夕遊覽の巷となつたのである。一度、江戸土産圖會（西村重長畫、次編は鈴木春信畫）や繪本江戸土産（一立齋廣重畫）や江戸名所圖會の類を披くと、其の狀が歴々としてゐる。山岡浚明の紫のゆかりに、永代橋邊の帆檣林立の景、兩國橋畔の殷賑雜

還の状を記したのを見ても、當時を回想することが出来る。又、八景と稱して、隅田川秋月、關屋落雁、潮入夕照、橋場夜雨、待乳晴嵐、駒形歸帆、洲崎晚鐘、富士暮雪といふ風に近江八景に擬した撰の有るやうになつたのも尤なことである。彼の葛飾北齋の妙手に成つた繪本隅田川兩岸一覽の如き、其畫様は能く當時の風俗を傳へたものと言つて然るべく、洵に時勢が産み出した結果に外ならないのである。

第三篇 多摩川

一 多摩川の水系及び名稱

水系

江戸名所圖會に多摩川の事を記して、

水源は甲州丹波山タマヤマに發し、當國多摩川に入ては日原川も會流す。御嶽山の麓を経て、青梅の南に傍ソビ、羽村及び福生フクサ、拜島等ハイシマの地に至る。又此地にて秋川の流も落合ひ、又石田と云に至り淺井川も合し、和泉村、中島村等の地より末は多麻、荏原、橋樹三郡の間を東流し、海に會せり。

とある。大日本地名辭書には水源を委しく記して、

西多摩郡雲取山の奥、雁坂峠カササカの東南に發し、市之瀬川といひ、柳

澤川、黒川等を合し、丹波川の名あり。

としてある。而して其の下流を六郷川と稱することは、亦世人の知る所である。又類聚三代格承和二年官符に見える石瀬川は、此の川の古名であるとは、故吉田東伍氏の説である。

此の川の武藏野開墾に關係の有る事は、吾妻鏡に見える所であつて、前に示した通である。さうして此の流を要害の地として、關戸に關を置かれた由來も亦前に出した。今の府中町分梅附近は、元多摩の河原であつて、往昔通路の要衝に當り、所謂分陪河原と云つて、古戰場である。太平記卷十に見える合戦の外に、後にも數度の戦があつた。それから又上水の事は、武江年表や瀬田問答等の諸書に見える所である。武江年表には承應二年の條に此うある。

分陪河原

上水



武藏小金井(廣重筆)

今年玉川の上水を都下に通じて、衆庶の用に充てしめ給ふ。△玉川上水は(中略)承應元年の春、玉川庄右衛門並清右衛門といへる者承りて、羽村より江戸までの水道を考へ、同十一月上水道掘割の儀を命せられければ、翌巳年初夏より仲冬に至り、羽村より四谷大木戸迄掘渡し、虎御門まで玉川の水を掛られしとぞ。其後諸方武家方市中に分水して日用とす。

今の東京市の水道に就いては、世人の熟知してゐる所であるから、こゝに贅しない。小金井の櫻は春毎に妍を競つて、此の水に影を蘸し、永く名勝となつてゐる。

川の名は蓋し水源地の丹波山村タニハヤマに取つたのであらう。丹波タニハの意義は如何と云ふに、詳ではないけれども、古語はタニハでもあらうか。或

川名

は思ふにタヲ(峠のこと)の類語であるかも知れない。タバ、タワ、タヲの關係が考へられる。尙、丹波といふ地名は、今の西多摩郡にも、古里村の大字に大丹波、小丹波が存する。川名の方が元で、それから郡名に及んだのであらう。

タマの漢字

今タマと發音して多摩と書くが、古くは多麻、多磨などとも書かれてゐる。萬葉集には、多麻河泊、多摩乃余許夜麻などの例があり、日本靈異記には、古志火麻呂者。武藏國多麻郡鴨里人也。又、大伴赤麻呂者。武藏國多摩郡大領也。などともある。延喜式民部上には多麻とある。さうして和名類聚抄には、多磨と書いて、而も太婆タバと訓してゐる。マはバと通音であるから、往古通はせて用ゐたものである。日本書紀を見るに、安閑天皇元年の條に、多氷の屯倉ミヤケとあるのは、谷川士清の通

多氷の屯倉

證には、多摩郡の事であらうかと疑つてゐる。氷は末の譌であるかも知れぬ。タバをタマと云ふよりして、後には玉の字を當て、其の名を美にするやうになつたものと思ふ。高田與清の多摩川考〔温知叢書所收〕には、參考に供すべき説が尠くない。

二 文學に現れた多摩川

萬葉集

多摩川の文學に入つたものは、前にも掲げた萬葉集の東歌を最も古いとす。

多麻河泊爾。左良須氏豆久利。佐良左良爾。奈仁曾許能兒乃。己許太可奈之伎。

調布

てづくりは調布である。和名類聚抄に、唐式云。白絲布。今按。俗用三字。作ノ布ノ三字。

云「天都久利乃」とある。同書に阿佐沼乃アサヌノと訓してある紵布の紵の字を、沼乃ヌノ。是乎。」とある。新撰字鏡には豆久利と訓してある。多摩川附近に調布といふ地名の存するのは、全く此の歌に因んだのである。僧顯昭の袖中抄第十五に、右の歌を解説した中に、「これは武藏國に兒玉郷と云所よりながれ出たる川を玉川とは云也。」とあるのは、玉の字を解釋しようとして、牽強の説を述べたもので、明に誤謬である。

拾遺集

拾遺和歌集卷十四戀四に、讀人知らず、

玉川にさらすてづくりさら／＼に昔の人のこひしきやなど

とあるのは、萬葉の歌に據つたのである。

内裏名所百首（建保三年）には、雜部に玉河里の題詠がある。但、此は必ずしも國を定めてゐない。次節に云ふ如く、玉川は武藏の外に數

内裏名所百首



多摩川

（載所繪圖所名戸江）川 摩 多

々存するからである。今其の十二首中、調布を詠んでゐるので、武藏の玉川であると思はれるのは、左のやうである。

てつくりやさらすかきねの朝露をつらぬきとめぬ玉河の里〔夫木抄には〕「つらぬきとむる」とある。」

たま河にさらす手つくりさらによにたのむ日影のあはれ過ぎ行く
定 家

近世人の和歌
加藤千蔭

次に近世人の和歌には、左のやうなのがある。加藤千蔭のうけらが花に、

月照三河水
むさしねに雲をさまりてさゞれ石も月にみがける玉川の水

月前眺望
第三篇 多摩川

玉川や千むらいほむら手つくりをさらしそふると見ゆる月かな
作者の尙古趣味が能く窺はれる。

村田春卿

村田春卿家集に、

春の始の歌とて人々と共によめる

白玉の、たまの横山、駒並べて、今日こえ来れば、霞立つ、野の
邊はるけし、氷とく、川とほ白し、かぎろひの、春日おもしろく、
てれる玉川。

此は短篇ながら興味がある。

高田與清

高田與清の松屋棟梁集に、

玉川兩岸百首の中に、

關戸川

年月は流るゝ水の關戸川せきとむべくもなき世なりけり

登戸

さしよする舟よりおりてのぼり戸の堤にしばし月を見るかな

此の題材は、隅田川兩岸一覽の如き思ひつきである。

三條實美

三條實美の梨のかた枝に、

多摩川にてえたる鮎を高崎正風ぬしにおくるとてよみてそへた
る

暇ありて遊びくらしゝ玉川のつりにかゝれる幸にぞありける

對鷗莊の詠と共に、是も亦風雅な貴紳を偲ばしめるものである。

俳諧

俳諧の方面では、次のやうなのがある。

玉川に遊ぶ

第三篇 多摩川

玉川や光る瀬の秋鮎の秋
調布の俤白し瀬々の秋

一 兆
蓼 太

分梅村にて

里人よ秋の夜語れ太平記

同

狂歌

狂歌では、狂歌江戸砂子集に、玉川

玉川の賤が手わざもむつまじや女波男波は布にうたせて

春日亭長人

遠目から流るゝさまもいつたんのさらせる布と見ゆる玉河

一寸法師

同書續編に、同題

玉川やさらせる布も行水もみな大江戸の仕入なるらん

東海道名所
記
六郷橋

がある

武藏野の萩の雫や落ちそはん紫をむる玉川のさと
末廣に猶もあふげる大江戸の水の要や玉川の里
などを認める。やはり古い歌の趣味に基づいたものである。

二 喜
捨 魚

轉じて文章の方面では、淺井了意の東海道名所記に、六郷橋の記事

六郷の橋、ながさ百廿間なり。橋のつめを右のかたへ池上へゆく
道あり。道の左の方半里ばかりに、獵師のすむ里あり、羽田村と
いふ。六郷の川上には大なる鮎あり。橋の上より西のかたに大山
みゆ、其道一日路有といふ。

但し此の橋が元祿元年七月洪水で流された後、渡船となつたといふ趣

は、成島司直の「みるめのさち」や小笠原長保の甲申旅日記などに見えてゐる。山崎美成編の疑問録にも、諸説が出てゐる。

平賀鳩溪(源内)の神靈矢口渡が、背景を多摩川畔に採つてゐることは、最も有名である。又太田南畝の明和四年の秋の遊玉川記は、載せて三餐餘興にある。同じ人の文化五年から六年にかけて玉川の邊を經廻つた日記もあつて、それは調布日記と題する。共に蜀山人全集に收められてゐる。それから成島司直の天保三年八月の玉川紀行〔輪池叢書所收〕も注目すべきものである。即ち

さらす調布さらくになど聞えし玉川の源は、信濃の國いさるが嶽といへる山よりいで、はるくと、甲斐が根をめぐり、この武藏野をへて、末は東の海にいりぬるこそ、そのはじめは觴をあ

神靈矢口渡

太田南畝の文

成島司直の紀行

らふとかいへるたぐひなるべし。檜の葉の名におふ宮のふることよりして、九重の雲井の庭にも聲えあげて、世々の先達も詞の光みがきたる名所なれば、月雪花の折にふれ、とひ見んの本意はありながら、難波の蘆のさはり多き習ひにて、關の名の霞の外に思ひくし過しけるを、ことし秋の暑もやうすらぎ、初雁がねもまたるゝころ、西の御所〔編者云、世子家慶の事である。〕かしこに逍遙し給ふ御あらましありと聞ゆ。こは享保寶曆のころならせ給ひし後は、久しくわたらせ給ふ事も有ざりしを、これも絶たるをつぎ、廢れたるを興させたまふ御政の一なるべし。やつがれものどめあへず。内藤安房守忠明につきて大殿の御かたへこの御供つかうまつらほましとねぎまゐらせしに、御道すがらの事書し奉るべしとの仰言下りぬ。

せばき袖にはつゝみ兼ねるかしこさにて、浮木の龜の日影見し心地せらるゝもあまりなりや。

二子
と書き出して、文を續けてゐる。尙、二子フタゴに於ける鮎漁の條を抜き出して置かう。

川顔には網引する船數々あり。こなたの岸には小鷹丸といへる御船をつなぎたるが、すべて朱もてよそひたる御船の錦の纜、金銀の具など日にかゝやき、あてにうるはし。また川倉といふをはじめ、袋網、瀬干築など、目路のかぎりに河面に設て、鮎とるわざのかぎりをつくしたり。このあたりの勝槩は、高妙のうつし繪も及びがたかるべし。河原の間に水のながれありて、鮎あまたはしるを、君をはじめ御かたはらの人々左手もてすくふ。わかきどち

はからうじてすくひ得し魚を、けにいるゝとて取放し、それをひろはんとてあたりまよふさまも興あり。鮎はかすゝの籠にこちたくもてつゞけたり。かくてかの小鷹丸にめさる。淺瀬なれば、御舟さしどもは、川におりたちて、御船をひく。漁夫等は船にのり、網引して見そなはし奉る。鶺鴒等は兼て川洲の末の方に、うづくまりゐたる、この時みな御舟の前に來り、水に入て鶺鴒つかふ様まためづらし。寛永の頃は角太河にて鶺鴒御覽の事、ものに見え侍れど、今はかのあたりにはたえてみぬ事なれば、たれもくゞめで興ず。かくて御舟より河原におり給ひ、袋網、瀬干などいふを御覽じて、河原に設けたる幔引めぐらしたるかたにやすらはせ給ふほど、吾もそのかげにかくれて、川顔のながめあかす覺えし

がまゝに、

調布の昔はとほきふることもけふぞくみしる玉川の水

かへるさはよし遠しとも玉川の鶉飼の手繩くるゝまでみむ

そのかみ豪奢を極めた遊興の状が、精彩のある筆づかひで、今も能く偲ばれる。

三 六玉川

六玉川

攝津

武藏の多摩川を叙し來つて、勢、他の玉川に想到しないわけに行かぬ。以下證歌に據つて、一わたり記さうと思ふ。攝津のは玉川の里と詠じてゐる。和漢三才圖會に、今云西面村サイゼン自三英木村自三英木村二十八町東とあるもので、萬葉集に三島江の玉江と出てゐるのも此處であると云ふ。後拾遺和歌集

第三夏、

正子内親王の繪合し侍りけるにかねのさうじにかき侍りける

相 模

見渡せば浪のしがらみかけてけり卯の花さける玉川の里

千載和歌集卷五秋下、源俊賴朝臣

松風の音だに秋はさびしきに衣うつなり玉川のさと

此のやうに卯の花や擣衣を詠んでゐる。

高野の玉川は、風雅和歌集卷十六雜中に、

高野の奥の院へ參る道に玉川と云ふ河の水上に毒蟲の多かりければ此の流を飲むまじき由を示し置きて後よみ侍りける

弘法大師

忘れても汲みやしつらむ旅人の高野の奥の玉川の水
とあるのに基づいて毒水を云ふのである。實は大師の此の詠に就いては、疑ふべき點がある。此の水に毒が有るとの謂はれに就いて、紀伊續風土記に四説を擧げてゐるが、大和本草の説のやうに、水上に砒石があつて、毒水が流れたのであらうと云ふのを、當つてゐるとしたらよからうか。

山城

山城のは井手の玉川と云ふ。即ち井堤河の事である。新古今和歌集卷二春下、皇太后宮大夫俊成

駒とめてなほ水かはむ山吹の花の露そふ井手の玉川

といふ優雅な詠が傳つてゐる。此は山吹を詠み込んだのである。一體綴喜郡井堤は井堤左大臣即ち橘諸兄の館のあつた所である。諸兄は井

奥州

堤寺を造つて、金堂四面の廻廊のまはりに、山吹を植ゑたといふ話で、其の故であらうか、井堤の山吹は夙く紀貫之や壬生忠見などの歌に入つてゐる。

陸奥のは野田の玉川と云つて、千鳥を配してゐる。新古今和歌集卷六冬、

みちのくににまかりける時よみ侍りける 能因法師

夕されば汐風こしてみちのくの野田の玉川千鳥なくなり

續古今和歌集卷六冬、順徳院御歌

みちのくの野田の玉河みわたせば潮風こしてこほる月影

奥羽觀跡聞老志の宮城郡の條に、「野田玉川在鹽釜村以南。往昔有河流。潮汐亦來往。石瀨所浮光躍金。深潭地清影沈壁。皆爲月得嘉

名。如今爲_二廢地_一。而唯遺_二野田之溝渠_一耳。或曰南部領九戸部亦有_二同名者_一。』と見えてゐる。又磐城にも之を附會してゐる所がある。

近江

近江のは野路の玉川と稱する。栗太郡に野路がある。野路は玉野路であらうと云ふ。玉野の原といふのもある。此の地は今、老上村と名づける。こゝの玉川を老上川とも云ふ。千載和歌集卷四秋上、

權中納言俊忠の桂の家にて水上月といへる心をよみ侍りける

源俊頼朝臣

あすもこむ野路の玉川萩こえて色なる浪に月やどりけり

夫木和歌抄卷十四、家隆卿

鶉なく野路の玉川けふみれば萩こす波に秋風ぞふく

此のやうに萩を配合するのである。

以上の五つに、手づくりの玉川を併せて六玉川と云ふ。玉川と稱する河流は尙、駿河や相模や常陸や羽前などにもあるけれども、以上の六つを顯著とするのは、全く古歌の力であると思ふ。

併文

本朝文鑑(享保二年刊)に僧丈草の六玉川前贊、向去來の六玉川後贊を載せ、又別に山口素堂の六玉川の跋も出てゐる。此等は皆伊丹の住、百丸の六玉川に關する詩歌集に記した文章である。去來のだけこゝに示して置かう。

六玉川後贊

向 去 來

田中の山本といへる所おほく、松村、四日市の名もすくなからねば、玉川の數も六つには限るまじきを、唯もてはやす人のめでたければ、その名の共に聞ゆならん。されば人は所によりてなつか

しく、所は人をまちてあらはるべし。然るを玉とよべる名の故あり、我公百九子は、是を知りたまふや。先よ井手の玉川は、殊に山吹咲亂れて、花には黄玉、葉には青玉と、置きそふ露の玉川なり。次は卯の花垣の白妙に見えて、小夜ふけがたの時鳥の、蜀の國より津の國まで、鳴て飛來れる玉川なり。三に武藏野の玉川は、さらす調布のさらくと、流れ給へる砂玉川なり。野路の玉川は外のけしきにひきかへ、萩の錦に波越えて、色ある月の玉川なり。その五は川の淺瀬も見えず、夕潮の千鳥も、共に吹上げられて、風に騒げる水玉川なり。終は名にし高野の奥にて、旅人のもし忘れても汲や侍らんかと、大師のあはれみ給ひける衣のうらの玉川なり。もしや人ありて、我が言のたしかならずといはゞ、玉に下

和が足をきられて、跛ひきるためしとも見るべし。

繪畫

志賀忍の理齋隨筆(天保八年刊)を見ると、其の六冊に、卷頭各々六玉川の繪を配してゐるのは、其の好尙が想察せられる。葛飾北齋の玉川六景の屏風は、彼が七十四歳の時の作で、名品として今に傳つてゐる〔近世繪畫史に據る。〕彼の大雜書に源氏五十四帖の畫と共に、六玉川の景を録して、婦女童幼の翫賞に供したのは、今も記憶してゐる人が多いであらう。

千種有功の詠

千種有功の千々廼屋集に、六所玉川の詠のあるのは面白い。

山城

駒なべていざ見にゆかむ蛙なく井手の川べの山吹の花

攝津

第三篇 多摩川

卯の花のさきそめしより白波のよるこそなけれ玉川の里

近江

秋萩の花の影さへにはふなりぬれて渡らん野路の玉川

陸奥

みちのくの野田の玉川たまにきて汲まむとすれば千鳥なくなり

武藏

たま川の里の松風さえく〜て夜は月をもさらすなりけり

紀伊

高野山みづのこゝろはしらねども玉といふ名のきよげなるかな

俗曲では、長唄の玉川も琴唄の玉川も皆六玉川を謠つてゐる。さうして古歌の趣致を踏襲してゐるのである。

俗曲

長唄

長唄の玉川〔琴唄としても使用する。〕

山城の、井出や見ましと駒とめて、なほ水かはん山吹の、花の露そふ春もくれ、夏來にけらし見渡せば、波のしがらみかけてけり、卯の花咲ける津の國の、里に月日を送るまに、いつしか秋に近江なる、野路には人のあすもこん。今をさかりの萩こえて、色なる波にやどりにし、月のみそらの冬ふかみ、雪げもよほす夕されば、汐風こしてみちのくの、野田に千鳥の聲さびし、ゆかし名たゝるむさし野に、さらす、さらすてつくりさら〜に、昔の人のこひしさも、いまはたそひて紀の國の、氣の毒なるは忘れても、くみやしつらん旅人の、高野タカノのおくの水までも、名に流れたる六つの玉河。〔日本歌謡類聚に據る。坊間に行はれるものには文句の異同がある。〕

琴唄の玉川

其一

いはで思ふ、心の色を八重にしも、うつしそむてふつれなさに、
春の月毛の駒とめて、いざ水かはん山吹。

其二

おのが秋とや小男鹿の、しがらむ花の摺衣、うつろふ波も紫に、
亂れそめにし白露。

其三

川門カハトにつたふ松風の、音だに秋はさびしきに、ころもうつ木の垣
もれて、砧もいとといそぐなり。

其四

きのふの袖もほしやらで、まだきぬれそふ朝露に、波も光をうち
よせて、さらすや賤が手づくり。

其五

汐風こして夜もすがら、月にみがける川浪も、くだけて物をおも
ひねの、夢をさそひて啼く千鳥。

其六

とかへる鷹の山深み、鹿は嵐のこがらしに、流るゝ水の名のみし
て、氷もむすぶばかりなり。

布晒（宇治川又は野路の玉川としてゐるものがある。）の所作が舞踊
に行はれることも亦世人の熟知する所である。さうして近世邦樂年表
に據ると、文化十四年三月には、六玉川秀歌姿見といふ所作事が、長

唄、清元、新内の出し物で上場せられてゐるのは、注目すべきことである。此う見て來ると、文藝上に於ける玉川の趣味は、決して些少ではないのである。

武藏野とその文學 終

跋

最早一昔、大正六年の春のこと、予は時の東京府知事井上法學博士の懇意を受けたのが動機で、武藏野に關する古來の歌謠や文章を蒐集し、解説を加へて、武藏野の文學と題する一書を編み、其の年九月研文社として出版せしめた。同書の緒言に記して置いた編纂の趣旨は左の通である。

古來の文學を探究して、所謂名所が和歌文の上に如何に顯れ、代々の人々に如何に認められたるかを知るは、一は地理景物の變遷を攷ふる資たると共に、又一は國民趣味の傳來を詳にする所以なり。而して之を以て古人の雅懷を追想すべく、且後昆を啓發すべきものあ

り。吾人一度思を古の武藏野に致さむか、武藏野の一語、直に念頭無限の興味を生じ來るにあらずや。是實に古文學に聯想を及すを以てなり。今主として純國文學上より（漢詩漢文の方面は如く之を措く。）武藏野を觀むとす。而して加ふるに隅田、多摩二流の事を以てせり。

さうして其の書を公にするに當つて、井上知事は高序を冠らせて、編述の來由を明にせられ、吉田（東伍）文學博士も亦序文を寄せられた。加之徳川（頼倫）侯爵は題辭を贈られた。此うして出來た小著は、同年十一月東京府から畏きあたりへ献上せられ、爲に予は至大な光榮を得たのであつた。想へば井上博士と吉田博士とは其の後程無く相前後して逝去せられ、徳川侯爵も近年溘焉として世を辭されたのである。予は此の小著を

手にする毎に、感慨無量、追念の涙滂沱にるものがある。

處が其書は絶版となつて久しく、ために此の頃では、再版を出すやうに、勧められることが二三に止らなくなつた。豫て武藏野書院主の前田君からも新修覆刻を再三促され、深町君も快く承諾された結果、前田君の手で改めて出版するやうになつた。前田君は武藏野の研究者である。予の小著もこゝに適當の人を得たのは喜ばしい。倦怠し新に上梓するについては、大體の結構は元通であるけれども、多分に増補改訂を施したから、新版同様の面目となつたのである。

昭和二年五月中旬

野村 八 良

同じ著者によりて

- ◇能狂言の研究 大正五年 光風館
- ◇謠曲名作選 大正十四年 明治書院
- ◇増補鎌倉時代文學新論 大正十五年 明治書院
- ◇國文學研究史 大正十五年 原廣書店

昭和二年五月十七日印刷
 昭和二年五月二十日發行
 武藏野とその文學 定價金二円七十錢

編者 野村 八良

發行兼印刷者 東京市小石川高田豊川町四三番地
 前田 信

印刷所 東京市牛込區體道町三〇六番地
 武藏野書院印刷部

發行所 東京市小石川目白臺
 武藏野書院
 電話東京六七一四六番



A 872

◎武藏野書院刊行書冊◎

前島春三

◆近松研究序篇 定價二圓三十錢

高木敏雄

◆日本傳説集 定價二圓五十錢

高木敏雄

◆比較神話學 定價二圓八十錢

坂本健一

◆日本風俗史要 定價二圓八十錢

赤堀又次郎

◆日本文學者年表 增補改版第一冊 定價三圓

山崎 麓

◆洒落本評釋 改訂 中

赤堀又次郎

◆社寺の經營 定價二圓五十錢

~~5/8~~

4

910.4

N95

終